

## 語の意味をつかみやすくするための工夫

——類語比較, 前置詞イメージ図, 語義展開図

東森 勲  
勝 啓一

『ジーニアス英和 第4版』(G4) では、語を記憶・理解する助けとなるような要素を大幅に増やした。例えば、多義語の各語義の意味のつながりを明示し（語義展開図）、類語の意味の「守備範囲」を鮮明にし（類語比較）、前置詞の意味を視覚化した（前置詞イメージ図）。これらを利用することで、語の把握にとどまらず、広く運用・発信にまで役立てていただければと考えている。

### ■類語比較

英語にはよく似た語の組み合わせが多い。類語同士にどんな意味や用法の違いがあり、どのように使い分けたらよいのか迷う学習者も多いだろう。そこで G4 では新たに「類語比較」の欄を設けた。G3 までも「語法」で扱っていたが、独立し、比較する語の組み合わせ数を増やしたものである。

その例を2つ、かいつまんで紹介したい。

start と begin はともに動作の開始を表すが、start がその後も運動が続くことに焦点があるのに対し、begin は開始の瞬間に焦点がある：The car's engine started [<sup>\*</sup>began]. (車のエンジンがかかった)。

destroy と break はともにものを壊すことを表すが、destroy は修理不可能・存在不能になるくらいに破壊することであるのに対し、break は外部から力を加えて誤ってあるいは故意に一瞬のうちに2つ以上に壊すことである：The World Trade Center towers were destroyed [<sup>\*</sup>broken] in the 9-11 terrorist attacks. (ワールドト

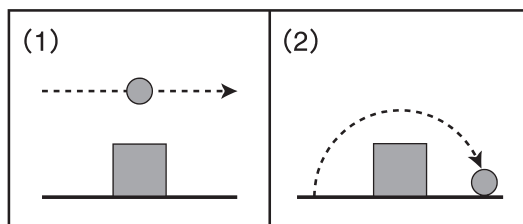
レードセンターのタワーは9.11のテロリストによる攻撃で破壊された)。

loud と noisy はともに物音がうるさいことを表すが、loud は音量が時に不快感を与えるほど大きいことを表す一般語であるのに対し、noisy はさらに、複数の音源から出る音が騒々しいの意味を含む：My neighborhood is very noisy. (近所がとても騒がしい) / My neighbor's TV is very loud. (近所のテレビの音がとてもうるさい) ◆  
音源は1つ》。

### ■前置詞イメージ図

前置詞は多義であり、語義をすべて把握することは学習者には困難であろう。そこで G4 では、認知意味論の考え方を援用し、前置詞の基本義や各意味・用法のイメージ図を適宜示した。

over を例に挙げると、これは弧を描いて対象物の上を移動するのが中心義といえるが、意味・用法によって、移動経路の違う位置が強調される。(1)「真上に」の意では経路の真上の位置が強調される (The plane flew over our house.), (2)「上を越えて」では経路で真上の位置を通過したことが強調される (jump over a brook), (3)「全体を覆う」では経路であるものの上をずっとカバ



ーしているの、経路全体が焦点を受ける (spread a cloth over the table), (4)「超えて向こう側に」の意では経路の最終点が強調される (We live over the road.), など。

G4 では above と比較しながら図を示した。全部を紹介する紙幅はないので(1)(2)だけを挙げる。

(ひがしもり いさお・龍谷大学教授)

## ■語義展開図について

G4 に「語義展開図」(以下「展開図」)を導入したのは、学習者が多義語におけるそれぞれの意味を理解・記憶する際の負担を軽減したいという願いからである。多義語の複数の語義は、ともすれば学習者には一見バラバラで、何を中心においてその単語を見るべきかわからない場合がある。そのような困難を少しでも解消したいと考えた。

展開図の構成は、初めに「基本義」(コアとなる意味)を置き、それからの各語義への展開を線分によって示し、簡潔なコメントを語義の後ろにつけて語義展開の背景にある論理を説明するというものである。

例として issue の展開図をあげる。

### 【基本義: 外へ出たもの・こと】

- 出ること(図 ③)
- ↳ 支給する(動 ④ ②)……外へ出して渡す
- 問題(点)(図 ①)……外に出て困ったこと
- 発行(図 ② a)……外に出すもの
- ↳ 出す; 発行する(動 ④ ①)

G4 では基本義がある語にも必要に応じて原義を載せていることから、原義も踏まえながら各語義をカバーするような基本義を設定することにしたのである。これはかつて Bolinger が“a single overarching meaning”と呼び、最近ではコアと呼ばれる①用例の最大公約数的な意味であり、かつ、②語の意味範囲の全体を捉える概念を目指したものである(詳しくは『英語感覚が身につく実践的指導——コアとチャンクの活用法』を参照ください)。

実作業の第一段階は展開図をつける語の選定で

あった。おおよその基準を太字語義が4つ以上の A・B ランク語とし、4つ以上あっても1つ2つの意味に還元できるもの(send 等)は外し、逆に太字語義3つでも語義間の関連が見えにくいもの(association 等)は選んだ。この作業に当たっては、校正刷りすべてのページに目を通して太字語義を目で追い、上記の基準を満たす語を拾い出した後、さらに編集部と取捨の検討を重ねた。

次が最も肝腎な「基本義」の設定であった。すべての太字語義を包括していなければならない、この設定により展開の仕方も変わってくる。様々な先行研究を参考にさせていただいた。語のイメージを解説した『英語語義イメージ辞典』、そして『スタンダード英語語源辞典』『メモリー英語語源辞典』の両語源辞典がとても役に立った。

それから各語義の右側に基本義との関係を示すコメントを付けていったわけだが、教室での説明と違い字数制限があることに悩まされた。なにしろ、語義、品詞(番号)を示して残ったわずかなスペースしかない。このことは基本義の設定にも影響を与えた。先の issue など多くの語は基本義が原義とつながるが(issue の原義は「外に出る」)、語によってはそれでは語義説明のコメントが限られた字数ではできないものがある。例えば stock は一番元の意味が「幹」だが、これを基本義にすると、ここから「在庫品」「貯蔵」「株」といった語義を限られた字数で説明しにくい。そこで基本義を「蓄え」としたのだが、こういうケースもあった。

展開図が表しているような多義語に対する説明は、先生方が教室で日常的に行っているものと思われるが、学習者が「単語は闇雲に覚えなければならぬもの」といった思いこみから解放され、「この意味とあの意味はこんな関係になっているのか」「この単語はこんなイメージで捉えたらよいのか」というように、自ら興味を持って英語の世界に踏み込む一助になれば幸いである。

(かつ けいいち・滋賀県立大津高等学校教諭)